

主 は、生きておられる

Unser HERR lebt

2019 **51**
graph magazine vol.

Unser
HERR
lebt

Unser
HERR
lebt
主
は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

vol. **51** 定価100円(税込み)

メッセージ

4 イエス様とはどのようなお方でしょうか ゴットホルド・ベック

21 この神がいてくださるから 那須^{まこと} 信

6人の証し

33 イエス様、私を弱くしてください 小々馬^{こごまつびこ} 亜彦

48 永遠の光へ 小々馬^{こごま} 真理子

56 主の家が私の居場所 田中光栄

63 あなたのみことばは、
私の足のともしび、私の道の光です 田中結実子

71 あなたの道を主にゆだねよ 吉岡久美子

78 主は私にかかわるすべてのことを
成し遂げてくださいます 佐山恵子

イエス様とはどのようなお方でしょうか

ゴットホルド・ベック

さて、あるパリサイ人が、いつしよに食事をしたい、とイエスを招いたので、そのパリサイ人の家にはいつて食卓に着かれた。すると、その町にひとりの罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油のはいった石膏せつこうのつぼを持って来て、泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った。

イエスを招いたパリサイ人は、これを見て、「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから。」と心ひそかに思っていた。

するとイエスは、彼に向かつて、「シモン。あなたに言いたいことがあります。」と言われた。シモンは、「先生。お

話してください。」と言った。

「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとりとは五百デナリ、ほかのひとは五十デナリ借りていた。彼らは返すことができなかったで、金貸しはふたりとも赦ゆるしてやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。」シモンが、「よけいに赦ゆるしてもらったほうだと思います。」と答えると、イエスは、「あなたの判断は当たっています。」と言われた。

そしてその女のほうを向いて、シモンに言われた。「この女を見ましたか。わたしがこの家にはいつて来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。あなたは、口づけしてくれなかったが、この女は、わたしが

はいつて来たときから足に口づけしてやめませんでした。

あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかったが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。だから、わたしは言うのです。『この女の多くの罪は赦ゆるされています。』と。というのは、彼女はよけい愛したからです。しかし少ししか赦ゆるされない者は、少ししか愛しません。』

そして女に、「あなたの罪は赦ゆるされています。」と言われた。すると、いつしよに食卓にいた人たちは、心の中でこう言い始めた。「罪を赦ゆるしたりするこの人は、いったいだれだろう。」

しかし、イエスは女に言われた。「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

(ルカ 7:36-50)

この人は、いったいだれか？

よく言われますが、私たちが何を知っているかは別に大した問題ではなく、誰を知っているかが大切なことです。私たちがもしイエス様を知らなければ、

イエス様とはどのようなお方でしょうか

人生のすべては虚しく、つまらないものではないでしようか。

私は葬儀や結婚式、福音集会でメッセージを語ります。それぞれの集まりの目的は違いますが、話す主な内容はまったく同じです。実は、どの集まりも結局は悩んでいる人の集まりですから、イエス様を紹介するための集いになるのです。

以前、一人の悩んでいる人と会いました。二十五年間、精神科に通い続け、何回も入院したことがあります。ある日、また入院したというので母親に「普通にちゃんと会社に行って勤めているのに、いったいどうしてまた入ってしまったの？」と聞きました。すると母親は「ひどい叫び声をあげたから」と言います。「何て叫んだの？」と聞くと「友だちがほしい！」と。

彼女は「孤独病」になってしまったのです。「孤独病」を癒いすのにどんな薬があるのでしょうか。それは、自分が愛されていることを、心から味わい知ることなのではないでしょうか。聖書の中に私たちは「孤独病」

を癒^いしてくれる、生きておられるまことの神の約束を見いだすことができます。「わたしはあなたを愛している。」(イザヤ 43:4)という約束、これは決して、空^{むな}しい口先だけの約束ではなく、嘘を知らない宇宙の創造主^{けいぞうしゅ}の約束です。「わたしはあなたたちを」と複数形ではなく、「わたしはあなたを」と単数形で、私たち一人ひとりに語っておられます。私たち一人ひとりが主の愛の対象です。生きておられる唯一の神は、人間一人ひとりに対して関心を抱き、人間を決して忘れようとしません。これを確信する人は、悩みながらも喜ぶことができます、本当に幸せです。イエス様は私をこんなにも愛してくださって、私のために十字架の上で死なれた。これこそが、愛されている証拠そのものです。もう一度イザヤ書43章4節のみことばをお読みします。

わたしはあなたを愛している。(イザヤ 43:4)

そして聖書の中心的なことばで最もよく知られて

いるのは、おそらくヨハネの福音書の3章16節でしょう。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、「世を」つまり、あなたを、私を「愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」という約束です。

御子イエス様とは、いったいどういうお方なのでしょうか。

決して、道を指し示めす何か、道しるべのような方ではありません。「道そのもの」です。「救い主」であるばかりではなく、「救いそのもの」です。そして、聖書の中の良いニュース、喜びの訪れとはこのことです。

確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

(2コリント 6:2)

今は、救われたいと思う人が救われる時代だということです。イエス様を知ることこそが大切です。「イエス様についての知識を得る」ことではなく、「イエス様

ご自身を知る」ことが必要です。

冒頭のみことば49節を見ると、その場にイエス様と一緒にいた人々が、「罪を赦^{ゆる}したりするこの人は、いったいだれだろう」と心の中で自問したとあります。「この人はいったいだれだろう」とは失礼な言い方ではないでしょうか。同じ表現がマルコの福音書6章を見てもできます。イエス様の郷里^{きょうり}ナザレの人々も、当時、何回も「この人」、「この人」、「この人」と言っています。彼らは近くに住んでいたので、イエス様のことをうわべだけはよく知っていました。そこを読んでみましょう。

イエスはそこを去^さって、郷里^{きょうり}に行かれた。弟子たちもついて行った。安息日になったとき、会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人は驚いて言った。「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手でなされるこのような力あるわざは、いったい何でしょう。この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン

イエス様とはどのようなお方でしょうか

の兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちとここに住んでいるではありませんか。」

こうして彼らはイエスにつまずいた。イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されたいのは、自分の郷里^{きょうり}、親族、家族の間だけです。」それで、そこでは何一つ力あるわざを行なうことができず、少数の病人に手置いていやされただけであつた。イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を教えて回られた。(マルコ 6:1-6)

6節に「イエスは彼らの不信仰に驚かれた」とあります。イエス様はきつと、その場所に集まった病人たちを皆、癒^いそうと思われたでしょう。けれども、「そこでは何一つ力あるわざを行なうことが」おできにならなかったのです。「少数の病人に手を置いていやされただけ」でした。どうしてかと言えば、それは彼らの不信仰のせいです。彼らが、「この人はいったいだれだろうか」という態度をとったからです。

冒頭のルカの福音書7章に出てくる、シモンという聖書学者、聖書研究家は、疑いもなく人間的にみれば立派な生活を送っていた男だったでしょう。多くの人々に尊敬され、敬^{うやまつ}まれていたに違いありません。その彼が、どうしてかわかりませんが、イエス様を招待したのです。イエス様は「いいよ」と招待をお受けになつてくださいました。この聖書学者は勿論^{もちろん}、聖書の内容をよく知っていました。宗教によつて真理が見えなくされており、イエス様がどういうお方か知りませんでした。

イエス様は、罪人としてわたしたちのところに来ない者は永遠の滅びに至ると強調されました。わたしは道そのものです。誰でもわたしを通してでなければ神のみもとに来ることはない、とはつきり言われました。ところが、シモンという聖書学者の考えは違っていました。自分たちこそが救いを持つていると思ひ込み、そう確信していたのです。彼は神のみことばに精通^{せう}しており、モーセの律法を堅く守り、祈り、道徳的に

高尚な生活を送っていたに違いありません。

彼はどうしてイエス様を招待したのでしょうか。それは分かりませんが、確かなことは、あの罪深い女性がシモンの許可を得ることなしに入ってきてしまったことです。彼女にとつてそれは簡単なことではなかったはず。私はみんなに変な目で見られている。私が入らうとすれば、あの家の主のバリサイ人、聖書学者は絶対にいい顔をしないだろう。

けれども、彼女は心の奥底に大変な悩みをもっており、もはや耐え難いものになっていました。恥ずかしさを乗り越えてイエス様のみもとにやつて来たのです。結局、賢い女性だと言えます。イエス様だったらなんとかしてくださる、と彼女は確信しました。37、38節をもう一度読んでみましょう。

すると、その町にひとりの罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油のはいった石膏^{せっこう}のつばを持って来て、泣きながら、イエス

のうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪^{かみ}の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った。

(ルカ 7:37-38)

とあります。彼女が高価な香油でイエス様の足をぬらした時、その部屋は良い香りで一杯になったことでしょう。そして、みんなの視線は一斉^{いっせい}にイエス様とその女の方に向けられました。聖書学者は目の前で起こされたことを見て、心の中で次のように思ったのです。「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから」。この女は自分とはまったく違う、汚れた罪深い女なのだから、イエスが預言者なら分かるだろうと。勿論^{もちろん}、イエス様はこの女性について、すべてのことを知っておられました。彼女が犯した罪について、彼女が自分の身の上に招いた債務についてわかつておられました。またイエス様は、彼女の本当の状態、すなわち、良心の呵責^{かしやく}、心の空しさ、満たされて

いない恐ろしいほどの孤独をも、つぶさに知っておられたのです。

一方、イエス様はこの罪深い女についてだけではなく、立派な生活を送っていたシモンのことも全部わかつておられました。イエス様はこのパリサイ人の傲慢^{ごうまん}を知っておられ、心の中で何を考えているかもご存じだったのです。ですから、イエス様はひとつのたとえを話され、実践的応用をなさったのです。この適用を通して、シモンはイエス様に承服^{しょうふく}せざるを得ませんでした。その後で、イエス様は罪深い女に向かって、みんなの前でおっしゃいました。

「あなたの罪は赦^{ゆる}されています。」

「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

別の言い方をすれば「あなたの信仰とあなたの信頼によつてあなたは救われたのです。あなたの罪はもう赦^{ゆる}されていますよ。あなたは恵みとまことの平和を手に入れたのです」とイエス様は言われたのです。

イエス様とはどのようなお方でしょうか

それを聞いた人々の反応は49節に「すると、いつしよに食卓にいた人たちは、心の中でこう言い始めた。『罪を赦したりするこの人は、いつたいだれだろう。』」とあります。

「この人は、いつたいだれだろう」。これは、非常に大切な質問ではないかと思えます。当時、この絶望的な女に罪の赦しを約束なさった方とは、いつたいどういう方だったのでしょうか。私たちはこの方について何を話すことができるのでしょうか。イエス様は昨日も今日も、いつまでも変わらないお方です。この箇所から、次の三つのことがはっきり言えると思えます。

第一に、イエス様は、人間一人ひとりを徹底的に知り抜いておられるお方。第二に、イエス様は、罪を赦すただひとりのお方であり、罪赦された確信をお与えになる唯一のお方。第三に、イエス様は、信じる者を救い、ご自分の平和を与えてくださるただ一人のお方です。それでは順に、イエス様がどういうお方かを見てみましょう。

ではなく、生きておられる唯一のまことの神と関わりを持つているのです。このまことの神は、人間によってごまかされることのないお方です。このまことの主なる神は、侮る（あなづ）ことのできないお方です。すべてのことを、厳密に取り扱われるお方です。このお方はどんな罪をも見逃すことができません。

ルカの福音書7章にもどると、パリサイ人は女のすることをみて「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから」と心ひそかに思いました。勿論イエス様は、突然家の中に入ってきた女性（もろこし）がどんな女であるか正確に知っておられ、また聖書学者であるシモンについてもすべてを知っておられました。シモンはただ心の中で思っただけで、何一つ声に出して言わなかったにもかかわらず、イエス様は彼の心を見抜いて、すぐにおっしゃったとあります。40節「するとイエスは、彼に向かつて、『シモン。あなたに言いたいことがあります。』と言われた。」ここでイエス様がシ

イエス様とはどのようなお方でしょうか

すべてを徹底的に知り抜いておられるお方

イエス様は、人間一人ひとりを徹底的に知り抜いておられます。このことは、変わることはない事実です。信じられないことですが本当なのです。イエス様は文字通り、どんなことでも、すべてを知っておられます。主イエス様の前に隠しおおせるものは一つもないと、聖書に書いてあります。

造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。

(ヘブル 4:13)

私たちの主は、すべてのことを正確にご存じであられます。一方、私たちは責任を問われ、債務を負っている者ですが、この主と自分自身が関わりをもっているのだということを憶えましょう。私たちは、宗教や道徳、その他これに類したものと関わりをもっているの

モンにおっしゃったことばの意味は「シモン、あなたはわたしの心の愛の対象である。ただ、あなたが耳を開き、心を開いてくれば、わたしはありがたいのだが」というものでした。イエス様は、この聖書学者の心の奥底にある高慢な思いと動機を知っておられ、また罪の女の心にある思いと動機をもご覧になっておられました。

両者の間には、越えがたい対立がありました。一方は、自分を正しいとみなし、誇りに満ちた傲慢なパリサイ人、他方は、罪を意識して、心砕かれた罪の女、しかも誇りの中にこだわっている罪の女でした。いま、この両者を比較してみたいと思います。社会的にはもちろん両者は決して一つになることができません。パリサイ人は、確実に上流階級に属し、高級住宅地に住んで豪華な生活をしていたことでしよう。他方、罪の女は、薄暗い隠れ場のようなところで生活する蔑まれた女性でした。また、道徳的にも両者は一つになることができませんでした。パリサイ人は、律法を規範と

する宗教的な生活を送っていましたが、罪の女は姦淫^{かんいん}を犯す売春婦でした。経済的にも、両者は比較することができないほど開きがありました。聖書学者は生活に何の心配もない贅沢^{ぜいたく}な暮らしぶりでしたが、罪の女はあまりにも貧しいので収入を得るために自分のからだ、自分の純潔を犠牲にしなければならませんでした。宗教的にみても、両者はかけ離れていました。パリサイ人は自分の宗教のために生きており、罪の女は宗教とは何の関わりももつことができず、また関係を持ちたいとは思わなかったのです。性質においても両者はまったく似たところがありませんでした。パリサイ人は、冷たい、計算高く厳しい男でしたが、罪の女は温かい心の持ち主で、大勢のいるところでも泣くのを恥ずかしがらず、イエス様の御足に口づけすることをためらいませんでした。

このように二人はまったく違っていましたが、一つの点においては完全に同じでした。すなわち、二人とも債務を負った罪人だったのです。

います。

すべての人は、(例外なく)、罪を犯したので、神からの榮譽を受けることができず (ローマ 3:23)

また、ヤコブもその手紙の中で、「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです」(ヤコブ 2:10)と書いています。

主の目から見ると、シモンは罪の女とまったく同じように罪深かったのです。多くの人のためには、立派で、宗教的で、道徳的にすぐれた生活をしている人間が、どうして姦淫^{かんいん}の女や人殺しと同じように救われなくてはならないのか、ということを理解するのは非常に困難なことです。ですから、いわゆる立派な人々、皆から尊敬されている人々、一度立派に成功した人々というのは、なかなか救われるのが難しいと言えます。

イエス様を信じることは、今まで自分は間違った

イエス様とはどのようなお方でしょうか

イエス様は聖書学者に向かって「シモン。あなたに言いたいことがあります」と言われました。それから一つのたとえ話を彼にされました。それを通してシモンは主の光の下に置かれたはずですが、41節「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとりには五百デナリ、ほかのひとりには五十デナリ借りていた。彼らは返すことができなかった。金貸しはふたりとも赦^{ゆる}してやった。では、二人のうち、どちらが余計に金貸しを愛するようになるでしょうか」。

疑いもなく、その時イエス様は話しを続けながらシモンの目をご覧になったのではないのでしょうか。このたとえ話の中で、イエス様は次のようなことを伝えられたのです。「シモン、あなたも不完全であり、あやまちを犯す者であり、あなたもまた自分の身の上に債務を負っている。確かに女の罪は五百デナリもあり、自分の罪は五十デナリに過ぎないと言うかも知れないが、わたしの目から見ると少しも区別は存在しない」。パウロもローマ人への手紙の中で次のように書いて

方向に向かって生きていた、今までのことは全部的是^{まこと}で、それであったと認めざるを得なくなるといふことではないのでしょうか。疑いもなく、その女性は罪深い女でした。イエス様はこのことを勿論^{もちろん}知っておられ、そのことを少しも否定していません。彼女の人生は憎むべき経験に満たされており、汚^{けが}らわしく、恐ろしいほどのものでした。彼女は贖^{あがな}われ、救われることが必要でした。イエス様がどんな罪人も救うことがおできになるといふことは、大いに主に感謝すべきことです。イエス様が赦^{ゆる}すことがおできにならないほどのひどい罪はこの世に存在していません。

けれども、またイエス様はシモンのような人々をもお救いくださるということは、いかに感謝すべきことでしょうか。実に、世の中で何一つ負債をもたらずようなこともせず、いわゆる立派な生活を送り、何一つ悪口を言われることのないような人でさえ、主の目から見れば罪人にすぎません。多くの人々の生活はシモンのようなものかも知れません。立派で、模範的で、正

直と思われているでしょう。けれども、私たちが必要としているのは、生きておられるまことの神が私たちをご覧になるその見方です。私たちも自分を、神様がご覧になるような目で見ることができたら、自分が罪深いだけではなく、失われている者であり、救われなくてはならない者だということを知るでしょう。イエス様はシモンについても罪深い女についてもすべてのことをご存じでした。それにも関わらずイエス様は、彼らを愛し、まことの救いを恵もうとされました。

世界を造られる以前から、イエス様は私たち一人ひとりの債務と罪をご存じでした。イエス様は私たちがどれほど主なる神の救いを必要としているかをご存じでした。それですから、イエス様は父によって定められた時に、天からこの地上に来てくださり、私たちのためにご自身のいのちを贖いの代価として献げてくださいました。そしてイエス様はよみがえってくださり、聖霊を通して今も働いておられます。私たちに恵んでくださり、私たちの罪の債務を赦すことを心から待つ

唯一のお方です。

だから、わたしは言うのです。「この女の多くの罪は赦されています…」
(ルカ 7:47)

主イエス様は女に「あなたの罪は赦されています」と言われました。この主イエス様のことばに対する応答として、一緒に食卓にいた人たちは、「罪を赦したりするこの方はいったいだれだろう」と言い始めました。しかし、イエス様のおことばを聞いたとき、この罪の女が何を感じたか想像できるでしょう。というのは、まさにこれこそ、彼女が待ち焦がれていたものだったのです。このイエス様のことばに彼女は圧倒されてしまったことでしょう。重荷は彼女の肩から落ちました。それだけではなく、彼女は完全に解放されたのです。

どれほど多くの人々が赦されない罪の重荷をもって、悩んでいるのでしょうか。イエス様の前で謙遜に自分の債務を告白する人は赦されます。これこそ聖書

イエス様とはどのようなお方でしょうか

ておられます。イエス様は、私たちに主の愛のすべてを感じさせたいと思っておられ、みこころにかなった人間にしようと願っておられるのです。ローマ人への手紙に次のようにあります。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

(ローマ 5:8)

罪を赦し、救いの確信を与える唯一のお方

イエス様とは一体どういってお方なのでしょう。

イエス様とは私たちを徹底的にご存じであって、一人ひとりのことを大切にするお方です。限らない愛をもって人間一人ひとりを愛してくださるお方です。

そして、二番目の答えは、イエス様は罪を赦すことがおできになるただ一人のお方で、罪からの解放者です。また、救いの確信をお与えになることのできる

の喜びの訪れです。私たちは、自分のすべての罪が赦されていることを確信しているのでしょうか。私たちは、イエス様に主の贖いのみわざを感謝したことがあるのでしょうか。

主ご自身が、私たちは罪の赦しを必要としていることをはっきりと言っておられます。というのは、私たちは自分自身に対して罪を犯し、他の人に対しても、生きておられるまことの神に対しても罪を犯しました。どんな人間も自分の犯した罪を、自分で赦したり、消し去ったりすることはできません。伝道者の書に次のような箇所があります。

神は、すでに追い求められたことをこれからも捜し求められる。
(伝道者 3:15)

人間はたとえどんなに努力したとしても、決して自分の力で罪を犯す前の状態に戻すことはできません。けれども福音は、罪を意識した人が主のみもとに来て、

イエス様を自分の人生に受け入れるなら、誰でも赦される」と約束しています。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。…」
(イザヤ 1:18)

パウロは殉教の死をとげる前に、弟子の一人であるテモテに書き送りました。

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に來られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れに値するものです。私はその罪人のかしらです。

(1テモテ 1:15)

イエス様は罪を赦したいと望んでおられるお方です。イエス様は罪を赦すことがおできになるただ一人のお

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

(使徒 4:12)

イエス様こそが、救うことができる唯一のお方です。どうしてイエス様は罪を赦すことがおできになるのでしょうか。第三に、イエス様はよみがえられ、今も生きておられ、私たちを恵もうと待っておられるからです。ヘブル人への手紙の著者は次のように書いたのです。

ご自分(キリスト)によって神に近づく人々(つまり、へりくだって、助けを求める人々)を、(キリストは)完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。
(ヘブル 7:25)

イエス様とはどのようなお方でしょうか

方です。いったいどうしてでしょうか。

それは第一に、イエス様に対して私たちは罪を犯したので、イエス様こそが赦すことのできるただ一人のお方なのです。イエス様によって私たちは救われ、造られた者であるのに、イエス様のみこころに背いて生きていました。そんな私たちのために、イエス様はご自身の血潮という代価を払って私たちを悪魔の支配から贖い出してくださったのです。けれども私たちは自己追求的で、自己中心でした。これは創造主および救い主に対する罪です。

第二に、イエス様が私たちの代わりに死んで、私たちが受けるべき罰をご自身の身に受けてくださったから、イエス様こそが私たちを赦すことのできるただ一人のお方なのです。債務を支払った方は、赦しを与えることがお出来になります。それ以外には誰も、私たちの代わりにいのちを捨てて覚悟をもっていなかったのです。イエス様こそが唯一の救い主です。ですから、初代教会の兄弟姉妹は次のように宣べ伝えました。

すばらしい箇所です。イエス様は永遠に生きていて、いわゆる大祭司として何があってもいつもとりなしをしておられるのです。多くの人々は次のように考えるかもしれません。「自分の罪と債務が赦されているなどと考えるのは傲慢ではないだろうか」と。決してそうではありません。イエス様がはつきりとおっしゃった通りです。「だから、わたしは言うのです。この女の多くの罪は赦されています」。そして罪の女に向かって「あなたの罪は赦されています」と言ったのです。

信じる者を救い、

ご自分の平安を与えるお方

この人はいったいどういとお方なのでしょう。いまままで述べてきたように、徹底的に人間一人ひとりを知り抜いているお方です。また、罪を赦すことができ、救いの確信を与えることができる唯一のお方です。

そして、イエス様は御子を信じる人を救い、ご自分の平和を与えてくださるただ一人のお方です。おそら

く、ここでまだ次のように聞く人がいるかも知れませんが、「私の負債、債務を赦してほしい、免除してもらいたい。でも救われるためには、私は何をしなければならぬの？」と。これに対して、主なる神のことは極めて簡潔です。「主の約束を信じるなら大丈夫だよ。信じればオーケーだよ」と。50節「イエスは女に言われた。『あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい』」。

この女は、何によって救われたのでしょうか。ただ信仰によってです。彼女はイエス様を信じ、提供された罪の赦しを受け取りました。彼女は自分の罪の債務を負ったままで、イエス様の御許まで来しました。彼女は、もしイエス様が赦してくださいださらなかったらおしまいだということを知っていました。イエス様は私を赦してくださいださるに違いない。イエス様は、私を聖めてくださいださるに違いない。イエス様は私を助けてくださいださるに違いないと、信じて足元にひれ伏しました。そして、何が起こったのでしょうか。イエス様は彼女を赦してく

イエスにあつて守ってくれます。

(ピリピ 4:7)

神の平安が私たちの心と意思を守ってくれます。主なる神の力によって、私たちは新しい人生を歩むことができるのです。

イエス様とは一体どういうお方なのでしょう。イエス様は徹底的に知り抜いておられるただ一人のお方であり、イエス様はただお一人、罪を赦すことがおできになり、救いの確信を与えるお方であり、またイエス様は信じる者を救い、ご自分の平和を与えてくださるお方です。私たちは、イエス様の愛に対して、主である神様に感謝したいと思わないでしょうか。赦されたという確信を自分のものにする人は、本当に大いに喜ぶことができます。

見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。

(イザヤ 12:2)

イエス様とはどのようなお方でしょうか

ださったのです。いったいどうしてでしょうか。彼女の信仰のゆえです。信仰は、イエス様が提供してくださるものを受け取ります。私たちが、イエス様の提供してくださるものを意識して受け取る時、その時にだけ、イエス様は私たちに「安心して行きなさい」とおっしゃるに違いありません。つまり、私たちの罪が赦された時に、心に平安が満ち、新しい人生が始まります。初代教会の証しとは次のようなものです。

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

(ローマ 5:1)

しかし、私たちは「神との平和」を持っているだけではなく、「主なる神ご自身の平和」をも持つべきです。

そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安(神ご自身の平安)が、あなたがたの心と意思をキリスト・イ

このように心から自分の口で証しし、主を賛美できることは、本当に感謝です。

この神がいてくださるから

那須 信

初めに、神が天と地を創造した。(創世記 1:1)

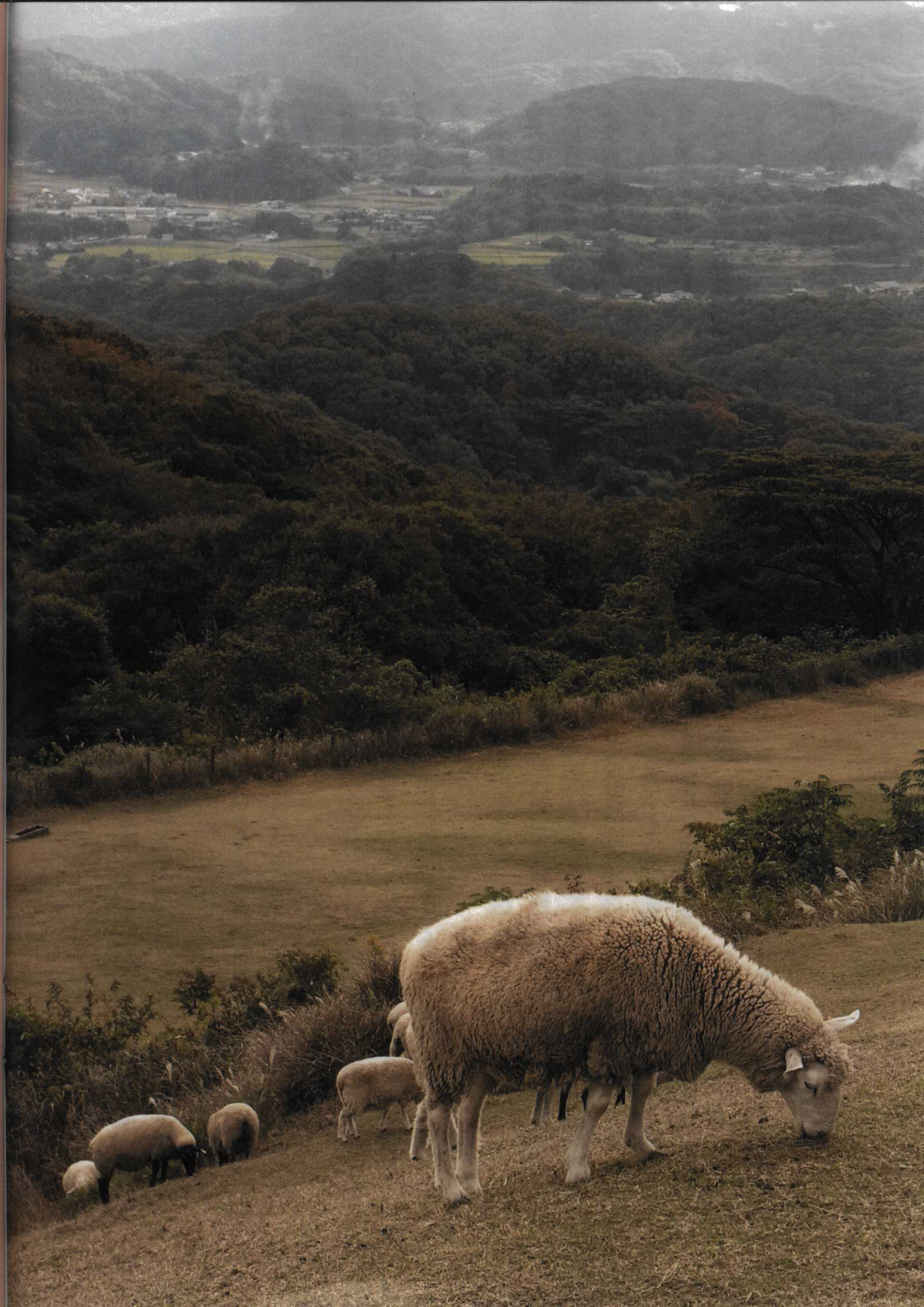
聖書は、その一番最初にこの言葉を掲げています。すべてのものを創造した神がおられます。人を含めてすべてのものは、神が求められたから、存在するようになりました。この世界は、非人格的な「ただ在るだけ」のようなものではありません。神のみこころと目的がすべてのものに染みとおっています。だから、この世界にも私たちにも、意味があります。永遠の神がなされたことなので、永遠の意味と目的があります。聖書はさらに人について、次のように告げています。

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。(創世記 1:27)

ここに、私たちについての秘密が明かされています。私たちは何者か。私たちは「神のかたちに創造された」存在です。神が語りかけることのできる存在です。特別な使命を持ち、自由意志を持つものです。しかし人は、神のことばに聞き従う生き方ではなく、自分の判断で生きる道を選んでしまいました。

神である主は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひ

この神がいてくださるから



とりのようになり、善悪を知ることになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」そこで神である主は、人をエデンの園から追い出された…

(創世記 3:22-23)

人は、自分が居るべきところである神のそばから追放されました。それは、本来の生き方ができなくなった悲惨な状態のままで永遠に生きる、という恐ろしい状態に陥るのを防ぐための緊急措置でした。

こういう経過を知って、なぜ私たちの心には「永遠への思い」があるのかが分かりました。私たちは、神から失われてしまった者であり、本来居るべきところに居ない者です。

以上のことから分かりますように、神が初めであり、中心におられる方です。人間と私たちの願望が、中心ではありません。人は、神のために造られました。神と人との関係が重要です。改めて、私たちは何者かと問うなら、私たちは神に求められて造られた被造物です。

偶然の産物ではありません。まず、神のみこころがあり、それで私たちが存在するようになりました。

私たちに染み込んでいるものの見方

私たちには、ヒューマニズム的なものの見方、考え方が染み込んでいます。ヒューマニズムは「人道主義」と訳されていますが、本来の意味は「人間中心主義」です。人間が王様、何でも自分が決める、人にも神にも支配されない、自分は自分のために、自分が良いと思うように生きる、という選択です。

私たちは、無意識に自分を中心に置いています。それで当然と思っています。こういう考え方の影響を、私たちは色濃く受けて育ってきました。神を中心に据えるという生き方を、私たちは知りませんでした。しかし、神のみこころが初めにあり、そして私たちが存在するようになったのであるなら、自分を中心に置くことは、根本的な誤りです。これが私たちの問題の根です。これがアダムが犯した原罪そのものです。

「神は私のためにある」と信仰者はあからさまには言いません。しかし、「神様からは救いをいただければそれで十分。日々の問題を解決していただければ、それで満足」と思っているなら、私たちは大きくズレています。それは人間中心主義的な信仰です。

改めて、私たちは何者でしょうか。私たちは神から出た者でした。しかし失われました。そして、神の深いあわれみと最大の犠牲によって、回復させられた者です。

天を作り出し、これを引き述べ、地とその産物を押し広め、その上の民に息を与え、この上を歩む者に靈を授けた神なる主はこう仰せられる。

「わたし、主は、義をもつてあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。こうして、盲人の目を開き、囚人を牢獄から、やみの中に住むものを、獄屋から連れ出す。

(イザヤ 42:5-7)

この神がいてくださるから

神はわれらとともにおられる

神は聖書を通して何を私たちに伝えようとしているのでしょうか。聖書の中に鳴り響いているテーマは何なのでしょう。それは、神が明かされたご自身のお名前に表現されています。

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。…」 (出エジプト 3:14)

ここで神のお名前は、『わたしはある』と、神の存在を

強調する訳になっています。

しかし、少し前の一二節には「神は仰せられた。『わたしはあなたとともにいる。』これがあなたがたのためのしるしである」とあり、ここでの「わたしはあなたとともにいる」は、原語では一四節の「わたしはある」と全く同じ言葉が使われています。ですから、一四節も「わたしはあなたとともにいる」という約束と理解して良いのです。このお名前がそっくりそのまま、モーセの一五〇〇年後に現われたイエス・キリストのお名前として繰り返されました。

「見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)

(マタイ 1:23)

つまり、イエス・キリストは、モーセに現われた神ご自身でありました。

「神は私たちとともにおられる」。これこそ聖書の初めから終わりまで鳴り響いているテーマです。初めから、いつも、常に、決して離れることなく、見捨てることなく、神はともにいてくださいます。これが、神と私たちの関係についての、根本的な事実です。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

(ローマ 5:6)

もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。

(ローマ 5:10)

私たちが神を認めず自分勝手に歩んでいた時も、反抗して神に逆らう言葉を口にしていた時も、神は私た

ちの反抗を悲しみつつ、ともにいてくださいました。

そして時が満ちて、神はひとりの人として、救いを携えてこの世界に姿を現わされました。それは、このお方の「死によって」私たちが「神と和解せられ」るためでした。

時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。
(マルコ 1:15)

神は「わたしはあなたとともにいる」と約束されただけでなく、神ご自身の方から私たちを迎えに来てくださいました。これこそが、聖書が私たちに告げる福音(良い知らせ)です。

ヨブに近づかれた神

ヨブという人が旧約聖書に出てきます。聖書の歴史の中でも古い時代に属する人です。

ウツの地にヨブという名の人^{けつぱく}がいた。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。

(ヨブ 1:1)

ヨブは神を恐れ、悪から遠ざかって誠実に生きていた人でした。誰に対しても親切で評判の良い人でした。しかしこのヨブに、次々とおそるべき不幸が襲いかかります。彼の持つ多くの家畜すべてが、異国人によって略奪されてしまいます。彼の子どもたち全員が、一度に事故死します。さらにその後、全身に痛くて痒い^{かゆ}でき物が生じて彼を苦しめます。ヨブの妻はこの有様に心乱れて、ヨブに向かって「神をのろって死になさい」(2:9)と言い放ちます。ヨブの不幸を知った友人たち三人は同情してやって来ましたが、ヨブのあまりの痛ましさに言葉が見つかりません。

その後、ヨブは、自分の身に起こった数々の悲惨と不条理さゆえに、理解することも受け入れることもできない心の苦しみを吐露^{とろ}します。

この神がいてくださるから

それに対して友人たちは、代わる代わるヨブの言葉に答えます。友人たちの説得の要旨は、「きつとヨブには何か隠れた罪があるのだ。だからそれを悔い改めなさい」というものでした。しかしヨブには全く心当たりがありません。友人たちの忠告はヨブを苛立たせるばかりです。どこにも光も慰めもありません。暗闇の時間がいつ果てるともなく続いていきます。

私はあなたに向かって叫びますが、あなたはお答えになりません。私が立っていても、あなたは私に目を留めてくださいません。あなたは、私にとって残酷な方に変われ、御手の力で、私を攻めたてられます。

(ヨブ 30・20～21)

私が善を望んだのに、悪が来、光を待ち望んだのに、暗やみが来た。私のほらわたは、休みなく煮えたぎる。悩みの日が私に立ち向かっている。(ヨブ 30・26～27)

この神の言葉に対してヨブはこう答えます。

ヨブは主に答えて言った。

ああ、私はつまらない者です。あなたに何と口答えできましょう。私はただ手を口に当てるばかりです。一度、私は語りましたが、もう口答えはしません。二度と、私はくり返しません。

(ヨブ 40・3～4)

神は、ヨブの訴えに対して何も答えられなかったように見えます。しかし、神は確かに答えられたのです。神がヨブに対して、ご自身の栄光をもって現われなさったその中で、ヨブの煮えたぎるように苦しむ原因となった思い、「神のなさることが、私には分かりません!」という激しい思いを、しっかりと受け止めていくくださる神の力強い腕があることを、ヨブは疑う余地なくはつきりと知りました。

「私の正しい生き方の中には、いのちは無かった。私の神を恐れる信仰の中にも、いのちは無かった。神は、

この神がいてくださるから

ヨブは神に向かって叫びます。「神よ。どうしてですか。私には、あなたのなさることが分からない。全く分かりません。私が苦しむことに何の意味があるのでしょうか。」と。

しかし、ついに神がヨブに応答されます。

主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。

(ヨブ 38・1)

この言葉に続いて、森羅万象に働く神の偉大な力が次々に語り続けられます。しかしその中に、ヨブの苦難について説明する言葉は一言も見当たりません。

主はさらに、ヨブに答えて仰せられた。非難するものが全能者と争おうとするのか。神を責める者は、それを言いたててみよ。

(ヨブ 40・1～2)

確かに私とともにいてくださる。この事実こそ私のいのちだと分かった。いのちなる神ご自身が、ずっと私を顧みていてくださったことを私ははつきりと知った。ああ、何も分からなくともこれで十分だ」。

神が人を造られた時の様子が、次のように描かれています。

その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

(創世記 2・7)

私たちは「いのちの息」すなわち「神の霊」を持つことによって生きるものとなりました。私たちのいのちは、肉体の中にはなく「神の霊」にあります。神がヨブにご自身を現わされた時、ヨブは「神こそ私のいのち、また光だ」と知りました。「子どもも財産も失い、ロボロの身体であつても関係ない。神こそが私のいのち、光、すべてだった! 神は私のすべてを知り、全能

の力によって私を完全に支え、私の生涯を導いていてくださる」と知りました。ヨブの目はまっすぐに、彼とともにおられる神を見据え^{みま}ました。

私はあなたのうわさを聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

(ヨブ 42:5-6)

深い悔い改めとへりくだりの中で、ヨブの心は満たされていました。

私たちに近づいてくださった神

すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは、一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。

(ヨハネ 1:3-5)

イエスは、ご自身について次のように告げられました。

だれも神を見た者はありません。ただ神から出た者、すなわち、この者だけが、父を見たのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。わたしはいのちのパンです。

(ヨハネ 6:46-48)

これはとてつもない言葉です。「わたしは神に等しい者である。わたしがあなたの方のための神のいのちだ」と宣言しておられるからです。しかしこの宣言の内容は、神ご自身がはるか昔から一貫して予告して来られたことの実現でした。私たちにとってどうしても必要なことだからです。「神のいのち」をいただくことによって初めて私たちの救いは実現します。

イエス様は神から出た者、すなわち神です。イエス様が「いのちのパン」です。私たちを生かす「神の霊」です。自分の中にはいのちも光もないことを知って求める

この神がいてくださるから

「この方」とは創造主なる神です。「この方にいのちが」ありました。私たちの中に光はありません。しかし、「この方」を持つなら「いのち」と「光」を持ちます。「やみ」はこの方が来られると、消え去ります。「やみ」とは何でしょう。この方を持つていないことです。

聖書には、この方すなわちイエスに出会い、神を、私のいのち、私の光として見出した人々の姿がたくさん記録されています。取税人であるために同国人にさげすまれていたザアカイ(ルカ一九章)、罪深い生活にはまり込んでいたサマリヤの女(ヨハネ四章)、生まれつき盲目であるために、人々から「あれは誰の罪のせいだろうか」と囁^{ささや}かれていた青年(ヨハネ九章)。彼らはイエスに出会いました。イエスの方から目を留めてくださり、声をかけてくださり、慈^{あはれ}しみを込めて近づいて来られるイエスの中に、神の本当の姿を感じ取りました。自分をうわべで裁かず、心の求めや渴きを理解してくださり、あるがままで受け入れてくださるこのお方にまことの神の「いのち」と「光」を見ました。

人のところには、どんな人の中にも入り、「いのち」となつてくださいます。イエス様はそのために来られました。神であるお方が、私たちのために人となつて来てくださったとは、何ということでしょう。これが現実^{じじつ}に起こりました。私たちは大きな驚きと感謝をもって、神がこのようなお方であることをほめたたえます。そして喜びをもってイエス様をお迎えします。彼を持つ者はいのちを持ちます。

聖書に、自分の欠乏を深く自覚させられた人の祈りが紹介されています。

ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けてようとせず、自分の胸をたたいて言った。「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。…

(ルカ 18:13-14)

私たちの天の父である神は、「いのち」を持たないま

までさまよっている私たちを、深くあわれんでおられます。神を求める者を喜んで満たしたいと願っております。

イエス様は私たちを生かす「いのち」であり、私たちの心の闇を照らす「光」です。このお方が私たちの内に入って来られます。イエス様を受け入れた人は「神のいのち」を持ちます。これは単なる心の問題ではなく、神の約束であり、私たちの内に起こる客観的な事実です。

イエス様は神であり、私たちを造られたお方です。この世界は神の創造された世界です。

私たちが何者であり、何のために生きているのかは神が握っておられます。私たちに何が必要であるかは神がご存知であり、神だけが完全に満たすことができます。そして神は満たしたいのです。私たちがそれを願うなら、神ご自身がなされます。

このような神がおられるから、人生に解答が存在します。

この世界は、「物がいつまでも、ただ在るだけ」の虚しい世界ではありませんでした。私たちは「泡」のように消えていく悲しい存在」ではありませんでした。すべてを握っている父なる神がおられます。そのお方は、私たちのために最大の犠牲を払うほどに愛してください。このお方だけが、私たちの心を溢れるほどに満たすことができます。私たちはこの方に信頼し、安心して自分自身をゆだねてよいのです。このお方は私たちの創造者であり、天の父です。神は必ずご自身のみこころを完全に実現されます。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。 (ローマ 8・38〜39)

わたしの口から出るわたしのことは、むなしく、わ

たしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。

まことに、あなたは喜びをもって出て行き、安らかに導かれていく。山と丘は、あなたがたの前で喜びの歌声をあげ、野の木々もみな、手を打ち鳴らす。

(イザヤ 55・11〜12)

那須信(名古屋キリスト集会)



この神がいてくださるから